ヤスクニ通信　No.273　2022 年 12 月 16 日　例会　毎月第3金曜　7:00～9:00pm（休日の時第 4 金）
発行　靖国神社国営化反対福音主義キリスト者の集い（略称「つどい」）　代表・星出卓也（Tel/Fax042-458-0251）
事務局　西東京市柳沢 2-11-13 西武柳沢キリスト教会気付　HP https://yasukuninotsudoi.christian.jp/

ヤスクニ・レポ　273

原発とエネルギー―安全保障

小川　正明（日本基督教団小金教会・会員）

数週間前、たんぽぽ舎のメルマガを読んだら、懐かしい小冊子のタイトルがあり、その著者が 15 年ぶりで、本名を明かしたという記事が載っていた。そのタイトルは「原発を並べて自衛戦争はできない」で、山田太郎というペンネームで著したが、本名は小倉士郎（元原発技術者）さんとある。「日本の原発は安全である。」とか、「原発はその被害の甚大さから武力攻撃をすることは考えられない。」と言うようなことが当然のように思われていた時代である。

３・１１福島原発事故を経験したことによって、原発の安全神話は崩れ、ロシアのウクライナ侵攻による、チェルノブイリ原発やザポリージャ原発の占拠で、原発の武力攻撃も現実のものとなった。もっともロシアの言い分では、原発をテロリストから守るために占拠したということであるが、今のところ原発を盾にして部隊を駐留させているようにしか見えない。

2011 年 3 月、菅直人首相は近藤俊介内閣府原子力委員会委員長に、最悪の場合避難区域がどの範囲になるか計算して欲しいと要請した。これに対し、近藤委員長が個人的にまとめて報告した「福島第一原子力発電所の不測事態シナリオの素描」、これがいわゆる「最悪のシナリオ」と言われているものである。これによると、強制移転区域は半径１７０ｋｍとなっている。ここには、人が住めない環境だということである。この外側ならば安全だということではない。勿論これでも大変な被害ではあるが、半径１７０ｋｍの円を対象にした事には異議がある。これは原発内の放射性物質がすべて一様に拡散されたという条件に基づいているからである。

例えば、フランク・フォンヒッペル名誉教授（プリンストン大学）らの試算がある。アメリカ海洋大気局の大気拡散モデルを用い、2011 年 3 月 19 日の気象条件で 4 号機の使用済み核燃料プールで火災が発生した場合、首都圏全体が高濃度に汚染され、強制移転の対象者は 3000 万人に上る。

日本の原発はすべて海岸に立地している。福井県には特に集中しているが、北海道や九州、四国にも存在している。これらの原発のどこかで放射性物質が放出された時にいつも風が海の方向に向かって吹いているとは限らない。福井県や新潟県の原発が重大事故を起こした時に、西風が吹いていたとしたら、その被害は首都圏全体に及ぶことを覚悟しなくてはならない。

西村康稔経済産業相は 11 月 9 日、衆議院経済産業委員会で菅直人委員の「ロシアによるザポリージャ原発への攻撃を踏まえ、日本国内に原発を保有すること自体が安全保障上のリスクではないか」との質問に対し、「原発への武力攻撃を全く考えていないわけではなく十分認識しており、資源エネルギー庁の審議会で自衛隊との連携などについて議論を行っており、これからもしっかり議論したい」と回答した。菅委員がさらに追及すると、西村大臣は「様々なリスクについて認識しており、自衛隊との連携など議論している。ミサイル攻撃があった場合、イージス艦での迎撃や PAC3（地対空誘導弾）での防衛により対処すると承知している。国民の命を守るため関係省庁と改めるべきは検証したい。」と回答した。

3 月 9 日の衆議院経済産業委員会では山崎誠委員の質問に対し、原子力規制委員会の更田豊志委員長（当時）は、「日本の原発は戦争を想定していない。原発がミサイル攻撃を受けた場合、放射性物質がまき散らされることが懸念される。現在の設備で避けられるとは考えていない。」と答弁している。

昔、原発はクリーンなエネルギーであるとか、安価なエネルギーであると宣伝されたことがあった。当時の工場では煙突から空高く黒煙をあげていたことからそう言われたのであるが、平常時でも原発から放射性物質が放出されていることには注目されなかった。黒煙と違ってこちらは目に見えないからである。長期的に見れば安価ではないことも明らかになった。何より安全でないものは、どんなに安くても採用できないことは当然である。３・１１以降、原発は危険であるということが一般に知られるようになった。

原発で重大事故の起こる確率について、1974 年

のラスムッセン報告では、原子炉一基あたり 100 万年に１回となり、ほとんど無視できるとされた。参考までに、2011 年 10 月に公表された東京電力の「施設運営計画」によれば、5000 年に１回となっており、３・１１事故前までは 1000 万年に１回だったそうである。

これらの確率の数字に確かな根拠があるとは思えないが、この中ではテロや戦争による破壊の要因については考慮されていないと思われる。

最近政府が原発再稼働のために強調しているのは、脱炭素社会の実現のためと、エネルギー安全保障である。前者は目に見える黒煙よりも目に見えない放射能の方がより深刻な脅威である。後者は輸入エネルギーの供給不足が不安だと言うが、原発事故による国土の喪失の方がもっと重大である。

最近の極超音速ミサイルを迎撃することはできない。あるいは、数百機のドローンで攻撃されたら、PAC3 を何基並べても防ぎきれない。

敵基地反撃能力を準備するよりも、戦争を起こさせない外交努力をすべきである。

戦争やテロがなくても原発は亡国のリスクを抱えたシステムである。仮に災害や事故がなかったとしても、大量の核のゴミが残る。この処理の目途は立っていない。

２０２２年１１月１８日例会奨励
「最後の七つの災害を」ヨハネの黙示録１５章１節

星出卓也（日本長老教会西武柳沢ｷﾘｽﾄ教会牧師）

黙示録 15 章は、節の数にして 8 節で終わる短い章ですが、16 章から始まる七つの鉢が地に注がれる準備のような役割を果たしています。「七つの鉢」とは神が警告として与える災いのこと。「七」の数は、「神の聖なる支配」を表しています。

14 章では、言葉によってこの世の神の前におごり高ぶった富と力を誇る都市の破滅の時が近づいていることを警告したのに対して、16 章の「七つの鉢」は、神が行われる行動を通して、最後の審判の時が近づいていることを警告します。神が行われる行動とは、具体的には人が罪の故に引き起こす災いです。これらの災いは、神の憤りが蓄えられて、最後は火山のように噴火し、爆発する時が近づいていることを教える警告の災いです。しかしそのような神の警告に対しても、地の人々はそれを退け、嘲り続けて、そのようにして最後の審判の時を迎えることを描いています。

「また私は、天にもう一つの大きな驚くべきしるしを見た。七人の御使いが、最後の七つの災害を携えていた。ここに神の憤りは極まるのである。」

黙示録で「しるし」が出てくるのは、12 章に２回登場し、この 15 章１節が三回目です。12 章１節に出て来る最初の「しるし」は、キリストの民である「女」、つまり、教会のことを表していました。そして第二目の「しるし」は、神の民である「女」を憎むサタンとその支配を表していました。そして本日の箇所で登場する三番目の「しるし」は、第二番目の「しるし」であるサタンの神の御心に反する支配が、最終的な審判により滅びを迎える時が近づいていることを、地上に起こる災害を通して警告するという「しるし」です。「七つの災い」の「七」の数も、それが神の支配の下で引き起こされるというメッセージを伝えています。

「ここに神の憤りは極まる」とある言葉は、「ゴールを迎える」「完成に至る」「目的を達する」という言葉です。そのゴールとは、神の憤りの完成。死の審判の完成です。しかもこの「ゴールを迎える」と言う動詞は、もう過去の一時点で終わったことを表現するアオリスト形で記されています。新改訳聖書の翻訳では「ここに神の憤りは極まるのである。」と翻訳されていますが、厳密に翻訳すると「ここに神の憤りは極まったのである」となります。なぜ将来の出来事を、未来形ではなく、歴史の一時点で終わったこととして表現したのか。それはこの出来事が将来のことでありながらも、既に決したこと、定まったことだからです。将来であっても神のご計画によって定められ、決定され、揺るがないものだからです。

主の決定によって御使いを通して起こる災難、災いは、この定まった時が刻一刻と近づいているということを私たちに教え、予兆し、既にそのように決したこと、決定したこととして警告して呼びかけているのです。神の鉢から注がれる災いと災難は、人々の目を覚まさせ、今日も主の終わりの時が近いことを教え呼びかけ、警告し続けています。

私たちもその「しるし」を今日に起こるあらゆる災いや災難から聴き取る者とさせて頂いて、よりいっそう主を恐れ、世の罪の在り方から離れ、主の御心に服従する者となりたいと思います。